

## ひさかた和紙 再興へ新商品

年 組 番 名前

飯田市下久堅のかつての主要産業で、江戸時代に全  
国ブランドだった「ひさかた和紙」を再興させようと、  
同市の「ひさかた和紙の会」と「関島水引店」が協力  
して、商品を開発しました。ひさかた和紙の歴史を読  
み取り、地域の伝統文化について考えてみましょう。

① 次の（ア）～（オ）の漢字には読み仮名を、カタカ  
ナは漢字で書きましよう。

（ア） 重宝 （イ） 結

（ウ） フキユウ （エ） エン

（オ） リエキ

（ ） （ ） （ ）

② 下久堅が和紙作りに最適だった理由は、何ですか。

③ 和紙の量産化にあたり、課題となっていることは、  
何ですか。二つ書きましよう。

④ 見出しが言い表したいことを考えて、□に入る適切  
な熟語を、記事から漢字二字で書きましよう。

⑤ あなたが住んでいる地域にはどんな伝統文化があり  
ますか。調べてみましよう。

# ひさかた和紙 再興へ新商品

## 和紙×水引 ポチ袋

### 飯田の伝統ブランド化

かつての飯田市下久堅の主要産業で、江戸時代に全国ブランドとして飯田の元結や水引を支えた「ひさかた和紙」を再興させようと、昨年12月末、同和紙を使った商品が誕生した。同市鼎上山の「関島水引店」が企画し、紙すき技術の継承や和紙の活用に取り組み「ひさかた和紙の会」と協力してお年玉などを入れるポチ袋を開発。今後さらに品目を増やし、江戸時代以来のブランド化を図る。



ひさかた和紙に水引飾りをあしらったポチ袋を紹介する関島さん(左)と羽場さん

下久堅産のコウゾを使って同会事務局長の羽場竜也さん(68)らがすいた、ひさかた和紙を使用。同店社長関島正浩さん(57)が縦約10センチ、横約6・5センチに手折りし、一つづつに赤、青、緑などの水引で飾り付けた。同市座光寺のエス・バード内の売店「おいでなんしょ」で一つ150円で販売している。

ひさかた和紙の歴史は江戸時代にさかのぼる。下久堅の南向きの斜面に原料となるコウゾが生え、きれいな水も豊富で和紙作りに最適。丈夫で水に強い和紙として知られ江戸でも重宝されたという。まげを結うときなどに使われる「元結」に加工された「文七元結」は飯田発の全国ブランドに。元結

## 期待の手担いで

### 地元「和紙の会」×関島水引店

の技術を生かした水引は現代まで続く飯田下伊那地域の特産品になった。

ただ、和紙自体は洋紙の<sup>フキユウ</sup>に伴い衰退。2000年に地区内最後の和紙工場が廃業した。飯田市民でも下久堅が和紙の一大産地だったことを知らない人は多くなった。そこで「ひさかた和紙保存会」が1996年に発足。小学校の卒業証書を作るなど伝承活動に取り組んだが昨年5月に解散した。7月に発足した和紙の会が活動を受け継いだ。

再びもり立てて担い手を確保したい和紙の会と、和紙や水引といった地場産業の活性化を願う関島さん。両者の間を、下久堅で生まれ育ったおいでなんしょの店長平岩道雄さん(54)が同店に<sup>エン</sup>関島さんが商品を卸していた(エ)でつないだ。関島さんがポチ袋を提案し商品化が実現。今後、本のしおりやのし袋も開発し、県外でも販売する考えだ。

「商業化できれば今ポランティアでやっている人たちが<sup>リキキ</sup>オを得ることができ、産業化につながれば担い手も現れるだろう」と関島さん。量産化にはコウゾなど材料不足や現在4人いる紙すき職人の不足といった課題も。羽場さんは「コウゾ畑をさらに増やしたい」と張り切っている。

(2022年1月14日朝刊・地域面〈飯田 伊那〉)

